MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

ミステリ読書案内

２０２２．９．２０　発行元
第 398 号　伊藤　剛
https://mystery-dokuan.com

MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

陳舜臣の代表作その2

第３０５号の「陳舜臣代表作第一弾」では『枯草の根』『炎に絵を』『方壺園』を取り上げた。今回は第二弾として更に３作を紹介する。今まで陳舜臣を読んだことのない読者に是非読んでほしいと願うからだ。

ミステリ作家としての陳舜臣

私が大学生だった１９７０年代後半には、陳舜臣の作品は大部分文庫になっていた。その時集中して集めたので、私の本棚にはたくさん並んでいる。今、ネットを見ると陳舜臣は歴史小説家の側面が大きく取り上げられていて、ミステリ本はあまり流通していないように感じられる。「陳舜臣はミステリ作家だった」と伝えたい。

私が陳舜臣ミステリを好んだ理由は、本格謎解き要素の強い作品があったことと、「歴史を感じられる」雰囲気があったせいだと思っている。戦前、戦後のアジア地域との関連を分析したい気持ちもあった。

当時の日本ミステリというと変におどろおどろしいものとか、逆にサラリーマン小説風の通俗的なものが多かったので、それを私は嫌った。海外ミステリを中心に読んでいたのもその辺に理由がある。

今回の代表作。推理作家協会賞受賞作品では『玉嶺よふたたび』ではなく『孔雀の道』を選んだ。名探偵・陶展文ものからひとつと思って『割れる』。そして歴史ミステリとしての『北京悠々館』を選んでみた。本が手に入りにくくなりつつある現在、是非読んでほしいと思う。

NO.3『北京悠々館』

１９７１年講談社。私の手元にあるのは１９７６年の講談社文庫。義和団事件直後。明治３６年。満州に進出してきたロシアが清と秘密協定を結ぶ噂が流れる。ロシアと対立を深めていた日本は協定を阻止しようと画策。美術商の若者・土井策太郎にスパイ役としての働きを託し北京に送り込む。土井の師である文保泰は、書画骨董を集めた悠々館を作り金儲けを考える。ただそれは表向きであって、文は政界の窓口を担っており、要人密談の場所として悠々館を活用していたのである。一連の工作活動の中で、文は密室状態の部屋の中で殺害され、工作資金も消え失せてしまう事件が起こる。五里霧中の状態に陥った土井は必死に解決を求めて活動していく…。

NO.1『孔雀の道』

１９６９年講談社。推理作家協会賞受賞作品。（『玉嶺よふたたび』と二作での受賞だった）　私の手元にあるのは１９７９年の講談社文庫。陳舜臣のミステリ作品の中では長い方。

英国人の父親と日本人の母親の間に生まれたローズ・ギルモアが物語の中心。終戦の翌年に神戸で母親が火事で亡くなり、イギリスに渡った後父親が亡くなり、１３年ぶりに日本に帰ってくるところから始まる。大学の英会話の講師の仕事をすることに。到着して間もなく宿舎の隣の部屋に住んでいるルッサン夫人が刃物で刺されて殺害される事件が起きた。ルッサン夫人はローズの父親を知っており、手紙も持っていた。この事件がきっかけになり、母親の焼死のことや父親が太平洋戦争開始の前年に巻き込まれたマーシャル事件というスパイ事件のことも情報が入ってくることになる。ローズは来日する時の船中で知り合った仏教研究家の中垣照道という青年とともに過去をたどる調査に進んでいく。そして最後に明らかになる事実は…。

陳舜臣にとっては中期の頃の作品であり、ストーリー性重視の方向に舵を切っている。戦争という大きな出来事を乗り越えた人々の生き方や考え方を中心に扱っている。もちろんミステリとしての仕掛けもある。

No.2『割れる　陶展文の推理』

１９６２年早川書房。「日本ミステリー・シリーズ」の第九巻として発刊された。私の手元にあるのは１９７８年の角川文庫。彼の長編第四作目に当たる。

物語は香港からやってきた林宝媛が神戸港に到着するところから始まる。岩佐商事香港支店のタイピストである。日本語は自由に話せる。彼女が日本に来たのはアメリカで行方不明になった兄・林東策が日本に行ったらしいと聞いたからである。会社仲間に紹介してもらった陶展文の家に寄宿することになった。名探偵・陶展文は中国料理の食堂を経営している。ちょうどそれに併せるように神戸の一流ホテル・イースタンホテルで殺人事件が発生。東京の実業家・林東策の名前で予約されていた部屋で、アパート経営の王同平という人物が頭を鈍器で殴られて死亡していた。兄の林東策は犯人と目されて警察に追われることに。

陶展文は『枯草の根』『三色の家』に続く登場。別に探偵を仕事としているわけではなく、ごく平凡な一般人に見える。名言らしき言葉は残すけれども行動は地味。林宝媛とともに行動して事件の解明に勤める。陳ミステリの初期作品は「本格もの」を特に意識した作りで、本書にも仕掛けがある。